

世界の終わりを
君とおどる

望月あん



ソラゴト文庫

世界の
終わりを
君とおどる

CONTENTS

- | | |
|-------------------|-----|
| 1. 回転木馬の不協和音 | 3 |
| 2. いつかの花 | 37 |
| 3. 夕立はアスファルトをはじいて | 92 |
| 4. 熟れた心臓 | 136 |
| 5. だからぼくらは夢を見ない | 174 |
| 6. 世界の終わりを君とおどる | 202 |

一、回転木馬の不協和音

目覚めると薄暗い路地に倒れていた。

ビルに挟まれた細い夜空に星はなく、ただ街の隙間を埋めるだけの黒い目地であった。大きく息を吸おうとすると血が溢れて喉につまった。咳込もうにも思うようにいかない。やがて嘔気とともに凝った血が込み上げた。

首筋へ伝うさまを肌で追いながら、一仕事を終えたように息を吐く。

また、生きていた。

これで何度目のいのちだろう。短い命が連なった、永いときを生きている。落ちたことに気がつかない深い眠りのように、いのちは死から生へと、ほんの一呼吸で繋がっていた。

濁った目をじつと虚空へ向けて、アスファルトに広がった血を背中できぐる。息を吸うごとに体の隅々まで命が行き渡り、どくどくと脈打ちながら傷口が塞がっていく。他人事だった痛みを自分のこととして感じるにつれて、今生の肉体へと馴染んでいった。

「嘘だ……なんで」

聞き取れないほど小さな声でした。若い男の声だった。視界の端に薄汚れたスニーカーがある。見上げると、細身で猫背の男がひとり立ち尽くしていた。

看守か、と呼びかけようとして思いとどまる。男の手には血のついたサバイバルナイフが握られていた。

「そうか、あんたに……」

殺された。

宿主の記憶をたどって確かめる。間違いなかった。

「なんで……、どうして死なない」

長い前髪の奥、眼鏡が見え隠れする。宿主にとっても見覚えのない男だった。

「あんた、誰だ」

「ひっ」

男の声は恐怖に震えていた。その手で殺したはずの人間が息を吹き返せば無理もない。

まだ痛む腕に力を込めてどうにか体を起こす。体中が錆びついたようにぎしぎしと音を立てる。息が上がって、ひどい眩暈がする。いまにも意識が途切れそうに錯覚する。目覚めのときはいつも死にいちばん近いところにいた。

「なんだよ……、どうなってるんだ」

男の手からナイフが落ちる。

「おれも、知りたいね……」

「はあ？ くそ……くそっ！ ばけものめ……！」

よろめきながら、男は暗がりから逃げ出していった。

壁に寄りかかかって座り込む。膜のように肌にまとわりついた血が体を重くした。荷物のなかにあったペットボトルの水をかぶり、顔や首に残った血を袖で拭う。黒いTシャツはひどく切り裂かれ、使い古した雑巾のようだった。

深夜にもかかわらず、路地から見える表通りは真昼のように明るい。往来の人々はすぐ近くで起こった惨劇に気づくことなく通り過ぎていく。ここは地上にありながら夜空の一部だった。

通りがかりの野良猫が、下手なバイオリンのような声を上げた。理不尽な在り方をする命への糾弾か。毛を逆立て、声をしならせて、瑞々しい生命を振りかざす。小さな体で表現される強い意志を、いつそ羨ましいような思いで冷たく眺めた。

「失せろ」

空のペットボトルを投げつけると、猫は身を翻して闇へ消えていった。

いくつもの死体を渡り歩き、何度も同じいのちを繰り返すうちに、理性、感情、倫理、慈愛など、人としての核は磨耗して小さくなっていった。もはや生命であることも難しい。

「ばけもの、か」

自分の正体もわからずに、終わらせる手立てのないのちを繰り返している。それはたしかに、ばけものだ。

終わらせたい、死にたい、そう思いはするものの強く望むまでは至らない。夜空をよぎる流星のようにそれらは一瞬で立ち消えて、願い事となえる暇もない。

ふっと意識を投げかけてみる。だがあちら側はまだ目覚めに至っていないのか、虚空へ呼びかけるようだった。

血なまぐさい路地へ、ゆったりとした足音が近づいてくる。顔を上げると先ほどの男とは異なる二十歳前後の青年がいた。それほど背は高くなく、金色に染めた髪はライオンのたてがみのようで、ボタンを外した胸元にはネックレスがいくつも揺れていた。

彼は見た目にそぐわず軽やかな、鼻歌でも歌い出しそうな微笑みを浮かべた。

「おはよう断罪。目覚めはどう」

断罪という呼びかけに確信する。

「……看守所」

看守所と呼ばれた青年は落ちていた財布を拾い、抜き出した従業員証をひらひらと振った。

「それとも都々くんと呼んであげようか」

「好きにしる。この宿主とも、どうせ次の転生までの付き合いだ」

吐き捨てるように言い放って、断罪は腹を撫でた。そこには血の染みが残るだけで、傷ど

ころか傷痕すらない。

看守はやわらかな笑顔のまま冷たく笑った。

「次の転生なんて、そんなものある保証はないよ。君たちは今生ついに〈浄化〉を果たすかもしれないんだから」

「いまさら、なにを」

口に残った血を吐き捨てて断罪は続けた。

「死体に寄生し続けるようなこんなまがいのものの命で、いったい何を望めと？」

「あれ。本気で諦めてるわけ」

「そうだな、とつくの昔に」

暗い夜の海へ投げ込まれ転生という波にのまれると、はじめは救われたいと足掻いても、いつしかただじつと波に身を任せているのが楽だということに気づく。むしろ夜空に燦然と輝く〈浄化〉という一等星は疎ましい。それならいつそ、かすかな光も射すことのない暗闇のほうがずっとましだ。

「さみしいねえ……」

カード類を一枚ずつ繰りながら、看守はけだるげに首をかしげる。

「終わりのない命は人類の永遠の夢だよ。大昔から偉い人はみんな不老不死に憧れながら死んだ。ぼくたちはいわば夢の体現者だと思うんだけど。はい、これ君の」

上から財布が降ってきて、断罪は反射的に受け止めた。従業員証に目を落とす。桁ばかり多い管理番号、居酒屋「楽」、柚木都々、二十六歳。テナントビル管理上のもので客の目に触れることのない証明写真は、眼差しがひどく重い。

「夢だつて？」

断罪は鼻で笑った。

「永遠の命なんて、叶わないから憧れるだけだ。たとえ手に入れられたとしても、それで人生が思い通りになるわけじゃない。ままならないものは、ままならないままだ。ましてやこれは命のまねごとにすぎない、罰としての転生なんだから。それをどうして夢だなんて」

「まあ、君が〈浄化〉を目指さないって言うなら、それでいいけどね。ぼくはこのループから抜け出したいなんて一度も思ったことがないし、たぶんこれからも思わないよ。延々続く転生も君たちが苦しむ姿も、すごく楽しい。君が〈浄化〉を拒絶するなら、そのほうがぼくにとつてはありがたいくらいだ。繰り返しこそ、ぼくが求めているものだから」

同じ転生の運命にありながら楽しいなどと嘯く看守が、断罪には理解しがたかった。

辺りには都々の持ち物が散らかっていた。刺されたときに鞆で抵抗したせいだ。汚れた仕事着、見返したことなどない仕事のメモ帳。作りかけのシフト表には八月中旬の休日希望が鉛筆で書き込まれていた。あとから厄介ごとに巻き込まれないよう、破れかかった鞆に放り込む。

「なあ看守、おまえははじまりの罪も、転生や〈浄化〉の真実もすべて知ってるんだらう。知りながら〈浄化〉を放棄する理由はなんだ。そもそも〈浄化〉は本来に存在するのか。もしかして〈浄化〉なんて——」

「おしゃべりはそのくらいにしようか、断罪」

看守の腕が向けられる。手には拳銃が握られていた。ためらいは感じられない。断罪は逃げることなく静かに見つめ返した。引き金に指がかかり、力が込められる。

「なんてね」

舌を出して肩をすくめ、看守は一気におどけた。

「一度やってみたかったんだ。マフィアみたいでかっこいいだろ」

「どうしてそんなもの。この国ではそうそう手に入らないだろ」

「意外とそうでもないんだな。あ、これはぼくを、隼弥はやみを死なせた銃なんだけどね」

「自殺か」

「いや、殺したやつがまだ近くにいたから殺して奪い取ってきた。何かの役に立つかもしれないだろ」

「面倒ごとには巻き込んでくれるなよ」

断罪は虫を払うように銃口を押しつけた。看守は慣れた手つきで弾倉を確認し、ベルトへ挟んだ。

「復讐ってやつさ。この体の」

「くだらない」

襤褸のようになった鞆を掴んで、断罪は小さく呟いた。

看守は都々の携帯電話をひらき、勝手に操作する。液晶画面から洩れる光で顔が青白く染まり、穏やかだった微笑みが一瞬で消えた。

「で、君の共犯者はどこ」

「共犯者？」

「罪過のことだよ」

「ああ……」

断罪は目を伏せて、あらためて意識を集中させる。

ともに転生を繰り返す三人は、特定の相手の居場所を感知する能力を持っていた。牢獄を見張る看守は断罪の裏切りを警戒し、目の前の罪人を処刑するだけの断罪には罪過しか見えず、殺されまいと命乞いをする罪過は一心不乱に看守に訴え続ける。奇妙な呼び名が先か、この能力が先か、断罪には知るよしもなかったが、はじめて死体で目覚めたときから変わることはなかった。

ところが今夜は何かがおかしい。

断罪は眉を寄せて目をひらいた。依然として罪過の居場所が掴めない。

目覚めて間もなく看守がこの場へやってきたということは、彼はいつもどおり感知できたのだろう。

「どうかした？」

それが、と応えかけて、断罪は思いとどまる。

たゆむことなく続いてきたものが突然途切れたのは、単なる偶然だろうか。

これは〈浄化〉の予兆かもしれないと、かすかな期待が脳裏を掠める。

どんなに疎ましく思っても、目の前にすると途端に心は色めきたった。終わりのない世界にようやく終止符が打たれるのか。だとしたら〈浄化〉を望まない看守には知られないほうが賢明だ。

事態を把握するまで時を稼ぐ必要がある。断罪はとっさの思いつきで言葉を繋いだ。

「服を着替えたい」

切り裂かれ、血で染まったシャツを指先でつまみあげる。看守は横目に見やって眉をひそめた。

「なにか問題が？」

「気持ち悪いしかなり臭う。できれば都々の部屋へ立ち寄りたいたい。人も多いし、早く着替えたほうがいいだろう。騒ぎになるかもしれない」

「騒ぎ、ねえ」

「ここは日本だろう。警察でも呼ばれたら面倒だ」

「それはそうなんだけど、だったらぼくらの宿主はこんなふうには死んだりしないよね」

看守はピアスへ手をやりながらにやつく。ピアスは片耳にしかなく、もう片方にはピアスホールだけがあつた。頭を撃ち抜かれたときにピアスは吹き飛んだのだろう。闇に溶け込むことのない金髪は、そちらだけ色が濃いように見える。拭いきれなかつた血のあとだ。

何か勘付かれたのかもしれない。断罪はじつと黙って看守を見つめた。

「まあ、いいよ」

気が変わったのか、看守はすぐに温厚な眼差しを向け、都々の携帯電話を投げて寄越した。外側にはびびが入り、ひらこうとすると本体がたわむ。いつまでも動く保証はなさそうだった。

「部屋は近いの？」

「向こうだ」

ネオンとは逆の方向を指す。

「そう」

看守は断罪に手を貸すことなく先に行つてしまふ。断罪は落ちていたサバイバルナイフを長財布に挟んで、看守のあとを追つた。

ビジネスホテルとラブホテルが並び立ち、道向かいには前時代的な電飾とキャバレーの文

字が躍る。

人々の声やにおいが届く。酔っ払いと体がぶつかりそうになって風のようにすり抜ける。ときおり肘があたつて目で謝る。その一瞬あとには背景と同化した。

高架のある大きな車道に出る。信号を待っていると大型トラックの振動が胸に伝わった。ガードレール沿いに並んだ客待ちのタクシーが夜とは思えない熱気を吐き出す。無秩序に鳴らされるクラクションがさらに街の温度を上げた。

前にいた看守が振り返る。

「今回はどんな女なの」

「普通だ。この国にいる普通の女だ」

「奴隷が普通るときもあつたけど？ あるときは奴隷船を追うのに苦労したね」

「ただの女子大生だよ。宿主の名前は柚木沙々奈。こいつの、都々の妹だ」

ただ居場所だけがわからない。どうにか看守を振り切つて罪過へたどり着き、事態を把握したかった。

信号が青に変わる。歩き出し、なかほどで看守がついてきていないことに気づく。

「おい、看——」

黒と白に塗り分けられた横断歩道で、うつむきがちに看守が口元を歪めていた。笑っているのか、苛立っているのか、悲しんでいるのかわからない。

信号機が半音ずれたメロディで歩行者を急かす。

「あ、ごめんごめん。行こう、赤になる」

看守は軽く駆け足になって、立ち止まる断罪を追い抜いていった。

風俗店の客引きが断罪のなりを見て視線をそらし、後ろを歩いていたサラリーマンに声をかける。そこには誰もいなかったような振る舞いに、断罪は騒ぎなんてとにやついた看守の顔を思い出していた。

一歩踏み出すごとにスニーカーのなかで人差し指の爪が親指に食い込んだ。断罪は冷ややかに痛みを見つめる。爪を切ったり消毒したりしなければ、傷口はいつまでもじくじくと痛むだろう。しかし断罪には興味がない。体がどうなるうと、動くなら問題ない。動かないなら、次の転生を待っただけだ。

隣を歩く看守は携帯電話に指を滑らせ、写真やメールを楽しげに眺めていた。

「おもしろいか」

「そうだね。懐かしいとも思うよ」

「宿主の記憶だ。おまえのそれは錯覚にすぎない」